

市民体育大会出場に想う

町内会連合会長

小林徳蔵

来る十月十日、深町は例年どおり三原市民体育大会へ出場します。ここ一年、出場できるかどうかと案じていましたから大いに安堵し、大いに喜んでいきます。一昨年までは長年にわたる深町保健体育振興会の骨折りで市民大会へ出場していたことを皆さまの記憶に新しいところです。

一方、町内会連合会では平成五年四月発足以来歩道設置なる当面の課題解決に専念するかたわら、もう一つの「体育部編成」にも力を注いできました。

昨年は保健体育振興会が解散し、連合会の体育部編成が未完成という状態で出場が危ぶまれました。幸い旧体振メンバーの方々のお世話で出場できました。

そうゆう危機を経験し連合会は体育部編成を急ぎましたが、事は意のごとくはかどりませんでした。編成作業が進まない原因はいくつかありますが、その一つに「連合会役員会の仕組み」に問題がありました。

運動会に参加して

金重八重子

秋の種蒔きに待望の雨だったが、運悪く運動会と重なってしまった。台風のためよくはならない天候にむずかしい選択だったろうが、子供の気持ちを第一に考えての決行だと知って嬉しかった。

運動会は定刻に開始し、小雨とはいえ悪条件の中子供達は生き生きと演技をこなし、教師と児童が一体となって、車椅子の少年を、ごく自然な形で集団の中で生かされた運動会、その中で頑張っている少年の姿に、今年も感動したのである。

「車椅子の背に視線が刺す」という障害者の詩を思い出



中の七月に六人が、一月には、さらに十六人が新人と交替します。これは各町内会毎に、①会計年度、②役員任期が異なっていることに起因しますが、これでは議案の継続した審議が深まりにくいわけでは、来年度の活動を中心に「体育部編成」の方策について話し合いをしていくと、町内会では皆さへ具体的に提案できると思えます。その節は冷静なご判断をお願い申し上げます。

何はともあれ、深町今後の明るい展望につなげるためにも、今年度の市民体育大会出場を成功させたいと思えます。出場選手、応援団、世話係の方々よろしくご協力お願いいたします。



したのだが、世の中が変わったとはいえ、まだまだ障害者を特別視する風潮は残っている。そんな中でも、深小の子供達は日常生活の中で弱者の立場が考えられ、行動できる人に、そして車椅子の少年も一人の人間として、心豊かに育っていることだろうと思つたものである。

午後からの町民運動会は、当然中止と思われるグラウンドコンディションだった。トラックの水を懸命にスポンジで吸い取っていた役員、体育部長、壮年会の方々の姿に、子供達の楽しみを叶えてあげたいという思いが伺えたのである。朝から楽しみにしていた未就学園児のかけっこ、ごほうびの風船とお菓子を手にして、嬉しそうな顔。親と対等に全力を出し切った走った六年生の充実した顔。午後の演技はこの二つで終了したのだが、観客も「これでよかった。」という充足感を味合つたのではなからうか。

暖かい地域、深小の行き

食生活考

(前号より続く) 石井良雄

五、カロリー計算さておいて、おかずのバランス考えよう。蛋白、豆、菜は一、一、四子供だったら一、一、三。蛋白とかく多くなり、野菜はどうも少なすぎ。

六、野菜、山菜、海藻は、なぜ四倍も取るのだろう。ビタミン、ミネラル足りない、病気になるから。こわいのよ。

七、血が濁ったらいけない。血は粘ってもいけない。ミネラル中のカルシウム、野菜だけでは足りぬから。牛乳、小魚、錠剤もあわせて取るとういでしょう。

八、海の幸やら山の幸、里の幸やら野の幸は、天地の恵み有難く、多くの人ののおかげです。頂きますと手を合わせ、ご馳走様を忘れずに。

いらっしやいませ
☆ 吉野美都枝様 清国 九月



秋季運動会のお礼

三原市深小学校

秋色しだいに濃く、山野に味覚の秋のかがりが漂う季節となりました。皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。平素は、本校(幼)教育推進のために格別のご理解とご協力をいただき、心より厚くお礼申し上げます。

さて、先日実施いたしました秋季大運動会開催にあたりましては、早朝の準備から後片づけにいたるまで町民の皆様のご協力のお陰で実施することができました。皆様の温かい声援と大きな拍手の中で子どもたちは喜びに満ちあふれ、力いっぱい演技をすることができ、小雨の中でも盛大な運動会にすることができました。ありがとうございます。

また、町内会の方から子どもたちにもたくさん参加賞までもいただき、大変お世話になりました。今後とも、皆様の温かいご支援を生かし、教職員一同力を合わせ、深小(園)教育に専念いたす所存でございますので、変わりがありません。ご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

届いた教育の中で育まれる子供達には、今深刻な社会問題となっている「いじめ」等とは無縁だと思つた。「禍転じて福となす」台風のもたらした「心暖まるさわやかな一日であった。」

十月各種団体行事予定

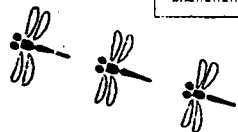
- ★小学校
 - ▼稲刈り10/7
 - ▼社会見学10/9
 - ▼参観日・映画10/19
 - ▼世代交流・トボール大会10/22
- ★幼稚園
 - ▼遠足10/9
 - ▼こもほ10/19
 - ▼参観日10/19
 - ▼誕生会10/25
- ★子供会
 - ▼親睦大会10/22
 - ▼ソフト会10/29
- ★女性会
 - ▼親睦会10/27
 - ▼10/27
 - ▼10/27

展望席

「食糧費」が新聞紙上によく登場する。我々の食糧費は百円単位だが伝えられる額は県レベルで数億円である。食糧費なんてケチな費目にせず、ずばり「飲食費」がよい。大蔵エリートが漫画の主人公で登場するのも時代の反映か。副業・蓄財・申告漏れ。それに「たかり」とくればニュースパリユーは充分。競輪・競艇に金を貸し、過去二十年間に二億近いお金が二つの宮家にころがりこんだ。「預り金」を返すにも国会承認が必要で「困った」。無くて困る人間と、余って困る人間が同居する社会も困った。議員のみなさんの視察旅行についても書きたいが紙面の都合で結論だけ。これを教育投資と考えるなら三十代前半の係長クラスだろう。以上は持たざる者の書生論だが、指導者への期待でもある。私が指導者に期待するのは「清貧」ではない。将来への提言と、実現に向けてのシナリオである。

感動のある生活を

田屋 高崎壽郎



戦後初の総選挙で、一挙に三十九人の女性議員が誕生した。その一人だった加藤シズエ氏はもう百歳近くになられるが、氏の長寿の秘訣は次の三点であるといわれている。

- ・一日三合以上牛乳を飲む。
- ・一日の生活をふり返る。
- ・一日十回以上感動する。

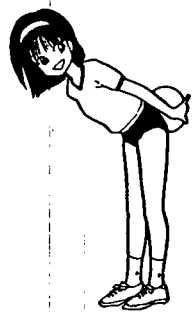
牛乳は栄養価が高く、女性に多い骨粗鬆症の予防にもなる。又、一日の生活をふり返ることは、人生を無駄に送らないことになる。ここでは、「一日十回以上感動する」について私見をのべてみたい。

「琴線にふれる」という言葉があるが、ひどく感動すると私は身振いをしたり、涙腺が緩んだりする。又、少しの感動でも豊かな気持ちになる。医学的なことはよくわからないが、感動は脳に刺激と栄養を与え、循環器の働きをよくするよう気がする。

新聞・テレビ・ラジオ・映画・音楽・絵画・読書・日常生活・自然観察など、感動のもととなるものはいくらかもある。要は、何事にも好奇心を持ち、静かに物事を観察し、新しい驚きを発見していくことだと思ふ。感動ある生活を送ることは、生きることの喜びを感させてくれる。二・三例をあげたい。

市民体育大会参加のお知らせ

市民体育大会が例年どおり十月十日 市民運動公園で午前九時開会されます。当日貸し切りバスが運行されます。下組出発が七時四十分です。町内各停留所でお待ちください。帰りも貸し切りバスが運動公園発で運行されます。



自家用車でお出での方は第五中学校と沼田東小学校グラウンドが利用できます。(学校から運動公園までは、無料バスが運行されます。)

当日おこしの方全員に、昼食、飲物の準備をいたします。たくさんのお出でをお待ちしています。

太平洋戦時中日記

幸谷益雄



昭和二十年三月

十八日、十九日の午前、始めて米軍戦闘機五機が大分航空廠に襲撃した。空廠に最後まで残っていた三名の内黒川組長と材料班一名は、自転車で誘導道路を二人乗で五百米むこうの山へ疾走避難を始めた。だがその途中組長は爆弾破片で、材料班一名は爆風で死亡した。遅れて走っていた清水益夫はその場に伏せて助った。私と他一名は空襲警報発令中、部署員住宅五十家族の避難誘導任務にあたった。

二十一日十二時半頃、私を含む三名で先日の航空機製造工場の被害状況を調査中、又も空襲警報発令、待避のため航空廠の門を約三十米出たところで自転車を乗り捨て、大分河川敷に駆け下り、地に伏した。こわ



いもの見たさに空を見上げれば、蛍光弾が音をたてて頭上をかすめていった。その間、全く生きた心地はせず、恐怖におののいていた。やっと警報解除のサイレンで道路に這い上がった。機銃の弾痕ここかしこでした。幸い、借用した自転車はすんでのところ無事でした。無事で皆んなの笑い声を聞いて帰途についたのは、大きなため息をついてからでした。

四月十九日 八時頃九三式複葉陸上練習機(アルコール燃料使用)

ご協力ください

深町の歴史を高崎壽郎様に書いてもらう予定です。戦前のもものは小冊子で残っています。三原市合併以降のもの断片的なものしかありません。記憶していられる方が健在な中に資料収集したいと思っております。写真等資料をお持ちの方はお借しください。又、関心をお持ちの方は一紙に編纂しませんか。高崎様まで

に爆弾取り付け装備を工事するのに関連して機体番号の調査の為、大分の龍尾地区に出向した。その見分を始めた間なし、工場主人より「帰廠せよ」との伝言があった。

主任の命令というのは、既に当工場より宮崎航空隊に、修理の為派遣された責任者や工員達を指揮せよとのことで、不時着損傷した松山航空隊所属の二機を一機に取りまとめる為で、本日十二時の列車で直ちに出發せよとのことであった。直ちに帰宅出發、大分駅軍用改札口で乗車券入手、たまたま同行の女性二人に話しかけたところ、その人達も同じ所に例の機体修理の部品を届けに行くところであった。

途中佐伯市を過ぎた所で空襲警報発令、列車はトンネル内に待避した。その後列車は延岡止まりで、都城行きに乗り換え、南宮崎に着いたのは日暮れ時午後七時であった。その辺の状況を乗り合わせた兵隊さんに尋ねてみたところ、「今は近くの山中五角兵舎へ避難中なのでさっぱりわからん」といった。とりあえず駅前

の旅館に行き一夜を過ごしたが、燈火管制で食事にもありつけず、着のみ着のまま床についた。

早朝四起床、約三キロ歩いて六時頃戦闘指揮所のわきにある専任伍長室で先行者の消息を尋ねる。やっと専任伍長室で朝食にありつき一息ついた直後、空襲警報発令で総員待避した。敵機B二十九が飛来し始めたのはその頃からであった。

私は先行した責任者や、工員が気掛かりであった。警報が解除される頃ようやく彼等にあうことが出来た。不時着機は一週間で修理完了。以後五月二日まで午前中空襲が続いた。その内四月三十日の爆撃は、時限爆弾を含む一三三発を投下した。

それ等は、翌朝六時半頃まで破裂し続けた。その破壊威力は八畳敷くらいの大穴であった。

以下次号へ